

第 14 回

化粧品トラブルによる 炎症後色素沈着

山下理絵 YAMASHITA Rie

湘南藤沢形成外科クリニックR総院長

1 はじめに

当院の美容外来で行っている問診チャートでは、「あなたの肌質は？」という質問から始まる。選択肢には普通肌、乾燥肌、脂性肌、混合肌の4つ、そして、一番下に敏感肌の項目を入れている。どの肌質でも、4つのほかに敏感肌にチェックを入れる人は多く、また敏感肌だけにチェックする人もいる。敏感肌である人はもちろん、敏感肌だと思っている人のスキンケアや施術などは、トラブルを起こさないように気をつけている。肌質は、角質水分量と皮脂量によって決まるが、数値化されているわけではない。また、最近ではこの4つに加えて、乾燥型脂性肌(インナードライ)を分類に入れることもある。

皮膚は人体の最も外側にある器官で、常に外界からの刺激を受けている。とくに顔面は覆うことが少ないので、見えない微小な傷を負いやすい。季節の変わり目、花粉症などのアレルギー、あるいは疲労やストレスによって、バリア機能が低下し、肌の状態が悪化することを多くの人が経験している。また、加齢とともに、水分量、皮脂量が減り、乾燥を実感する人も多い。一般的にスキンケア商品は、肌質をベースに選択することが多く、肌のバリア機能維持、保湿などのために使用するが、化粧品かぶれ(接触皮膚炎)を起こすこともある。化粧品かぶれは、その化粧品に含有されている成分で生じる。軽度であれば外用剤で治癒するが、重度や処置の仕方を間違ったりすると炎症後色素沈着を残すこともある。化粧品による

かぶれは、その効果に期待しているだけに、心身ともにダメージを受ける。今回は、化粧品、染毛剤によるトラブルを報告する。

2 症例：50代女性

化粧品、染毛剤を変えた頃より、かぶれや色素沈着が生じた。1カ月使用後に中止し、ワセリンを塗り経過を見ていた。しかし、色素沈着が増強したため、化粧品相談室へ連絡したところ、病院を紹介され受診するように勧められた。受診先では、ハイドロキノン(詳細不明)を処方され塗り始めたが、痂皮が剥け、再度炎症が起こり悪化した。再受診し、ハイドロキノンの使用中止をいわれ、原因はわからないが体質によるものだと説明される。その後、さらに色素沈着が悪化したため、別の皮膚科を受診する。ワセリン外用を処方され、開始した。1カ月後の診察で色素沈着は残存する可能性が高いと説明され、内服(ビタミンC・パントテン酸カルシウム配合剤、トラネキサム酸)を処方されるも、心配になり当院を受診した。側頭部から顔面側部、頸部に至り、鱗屑を付す灰青色の色素沈着を認めた(図1)。また、掻痒感とピリピリした痛みなどの自覚症状が継続していた。ダーモスコピーでは、乾燥および色素沈着を認めた。接触皮膚炎による色素沈着と診断し、原因物質の検索および治療方法の選択のために、血液検査、パッチテスト、組織生検を行った。

血液検査：好酸球、IgEなども含め正常、MAST33でも陽性所見はなかった。